

<研究ノート>

小学生ドッジボールのクラブチームにおける 養育者の意識

— 子どもの成長に対する教育効果を中心に —

佐野 司*・松崎 茂樹**・宮寺 晃夫*

Consciousness of Parents for Dodge-ball Club Teams of Pupils

— Focused on Educational Effects on Pupils' Growth —

Tsukasa SANO *, Shigeki MATSUZAKI ** and Akio MIYADERA *

1. 問題と目的

小学生の学校外における習い事は、学業と並び重要な活動のひとつである。子どもたちのゴールデンエイジといわれるこの成長時期にスポーツや造形活動、もしくは音楽等の活動をさせることによって、親や指導者を含めた養育者たちは、健やかな身体づくり、生活習慣、芸術における感性を養うことを期待している。この中で少年スポーツの活動に注目すると、1997年度には90万人にまで減少したスポーツ少年団の加盟人数は、2003年度には93万人にまで回復している（藤原・堺、2004）¹⁾。近年は少子化の影響からか団員数自体は減少傾向にあるものの、加盟した指導者数は着実に増加している（日本体育協会、2008）²⁾。これらは、スポーツ少年団をはじめとする子どものスポーツ組織がその養育者の参加を伴って社会の中に定着してきた結果

である。

少年スポーツの運営に注目すると、参加している養育者側がどのような意識を持つのかは、スポーツ組織の発展に大きな影響を与える。小松・嶋谷・山下・池田（1992）³⁾では、少年サッカークラブ員の母親を対象に、クラブへの期待と子どもの課題達成の可能性が調査された。この調査では、クラブの特性から選手の養成を主軸とした「競技指向型」と、スポーツの普及・振興や子どもの心身育成、コミュニティ形成などを活動の重点とした「地域指向型」にクラブが分類され分析された。結果からは、スポーツクラブに対する母親の意識とクラブの指導目的との間に食い違いがあることが指摘されている。また桑原・柳・向山・竹下・川西（1999）⁴⁾でも、指導者、保護者の間で少年スポーツの指導目的や期待といった意識にズレが生じていることが報告された。そこから、行き過ぎた勝利至上主義

* 情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

** 情報コミュニケーション学部情報メディア学科4年、Tsukuba Gakuin University

は、指導そのものを歪ませるだけでなく、保護者から指導者への過度な期待の原因になる可能性も指摘されている。

前述のような競技指向型クラブは、保護者にはそのスポーツ技術の向上を中心に指導を行っているもの、と捉えられる。特にプロ化されているスポーツでは、若いうちからの技術獲得がメディアなどで積極的に評価されるため、保護者もまた競技成績や運動能力の向上などに子どもの成長を見いだそうとする意識が高くなる。その一方で地域指向型のクラブでは、スポーツを通じて広い意味での道徳性や社会性を身につけることも含めた指導が行われるもの、と保護者には捉えられる。スポーツ技術の評価も行われるであろうが、保護者の意識は競技指向型のクラブと比べ相対的に低くなり、むしろクラブに所属したことによる精神面の成長などに意識が向くであろう。

ところが保護者や指導者らは、クラブの活動形態とは独立してそれぞれの意向を持って子どもをクラブに所属させる側面もある。競技指向型のクラブであっても子どもの精神面の育成を重視する指導者はいるし、地域指向型のクラブに子どもを入れているが技術獲得に熱心な保護者もいる。このようなクラブの運営方針と指導者、保護者らの意向やクラブへの期待との乖離が、先行研究の報告の背景にあるものと考えられる。

同じ競技種目でも個々のクラブによる活動形態に違いが生まれやすいのは、野球やサッカー、バスケットボールなどプロ化されたメジャースポーツ特有の現象とも考えられる。ある発達段階（たとえば中学校の受験勉強の開始まで、など）でクラブ活動を終わりにすることを想定して子どものサポートをする養育者と、プロ選手の育成を考えた競技指導と生活面のサポートまで行う養育者では、その意識が分かれることは明白である。その一方で、各クラブの指導方針は明示されていない

ことも多く、競技指向型・地域指向型といったクラブ活動の方針はあくまで暗黙の了解になっている。これらの現状を鑑みると、クラブの指導者や保護者の間で指導方針といった運営上のコンセンサスが取りづらい側面がメジャースポーツのクラブには内在するのかも知れない。実際に少年サッカークラブでは、競技指向型に比べて地域指向型クラブで、その運営のあり方について母親の不満意見が多いことが報告されている例もある（岩下・山下・小滝・鈴木・片尾・鎌田, 1993⁵⁾。また、成人がコミュニティスポーツクラブに参加するときにも、個人の参加意識に世代間で差があることを指摘する研究もあり（李・仲野・金子・守能・江橋, 1989⁶⁾、指導や教育への意識についても同様の状況が考えられるのである。

しかし、競技として確立されたスポーツであっても、プロ化されていないものは存在する。たとえば小学生の行う少年スポーツのひとつにドッジボールがある。プロ化されている他の少年スポーツと比較すると、ドッジボールはその活動の特異性が指摘できる。まず、その実体験の共有範囲にある。小学生時代の体育の授業や休憩時間など性別に関係なく参加でき、また世代を超えた実体験があることから、ドッジボールはコミュニティスポーツとして間口が広いものになっている（日本ドッジボール協会, 2005⁷⁾。これは、実際に競技している小学生だけでなく、活動をサポートする大人にも実体験が共有されることを意味する。また、性別に関係なく一緒に競技できるドッジボールは、女性には実体験の少ない野球やサッカーなどと比較して、父親だけでなく母親にも経験が共有されやすい。このように世代、性別を超えた共有意識がある一方、その競技される期間がごく短いこともドッジボールの特徴である。競技人口のほとんどを小学生が占めるドッジボールは、プロ化されていないマイナースポーツの

一つである。さらに、日本中学校体育連盟の定める公式開催種目になっていないことから（日本中学校体育連盟，2008）⁸⁾、ドッジボールは総合体育大会において中学生の正規の競技とされていない。したがって、ほとんどの小学生が卒業と同時に他のスポーツに転向してしまう種目なのである。

「プロ化されていない」「中学校で部活動がない」ことを考えれば、ドッジボールは地域指向型のスポーツとして活動し、子どもの地域コミュニティとして運営されることは養育者間のコンセンサスになることが予想される。その一方で、チーム内での選手らの役割分担やゲームの駆け引きを含めた団体スポーツとしての競技指導を積極的に行うなど、クラブチームの活動形態には競技指向型の側面が全くないわけでもない。競技者が小学生に限定されるにも関わらず、日本ドッジボール協会が統一ルールを整備して大会が開催されるなど、全国大会の実施状況は他のメジャースポーツと比較しても遜色はない。このようにドッジボールを取り巻く特殊な活動形態の下で、子どもを預ける親や指導者がドッジボールにどのような教育効果を求めているのかについては検討の余地がある。

そこで本研究は、小学生ドッジボールのクラブチームにおける養育者の意識を明らかにすることを目的とする。まず、指導者や保護者らがドッジボールに参加した子ども達の成長をどのように捉えているのか、その潜在的な判定基準を検証する。日本ドッジボール協会が定める全国統一ルールには、自主性・自己責任・向上心といった子どもの精神面の育成を意図したものが採用されている。養育者がドッジボールの技術指導の中にもこのような精神性を意識し、技術や体力の成長と平行して精神面の成長を感じているかも知れない。さらに、それら教育効果の判断に養育者間の違いがあるのかについても検討する。前述のとおり、ドッジボールクラブが競技時期

の限られたコミュニティスポーツとして運営されていることは養育者の間で合意されやすい。そこから、監督・コーチといった指導者と活動をサポートする保護者の間でも、子どもの成長をとらえる意識に大幅な隔たりがないことが予想される。

2. 方法

2.1 項目作成と予備調査

「ドッジボールに参加させた子どもに期待する成長」について、予備的に項目作成を行った。作成はドッジボール大会の運営スタッフの意見をもとに行い、教育学系、心理学系研究者と大学生10名による類似した項目の選定、除外を行った。質問項目は子どもが少年スポーツに参加したときに経験するさまざまな場面をもとに、以下の4つの区分から記述を行った。区分は、（1）運動能力の向上：「体力をつけてほしい」「反射神経をよくなってほしい」など、成長期の身体づくりや運動能力の成長に関する項目、（2）競技上の精神的成長：「集中力を身につけてほしい」「強い相手に立ち向かっていく姿勢を身につけてほしい」など、競技中の精神的成長に関する項目、（3）スポーツの捉え方の成長：「スポーツマンシップとフェアプレイの心を学んでほしい」「体を動かすことの爽快感を経験してほしい」など、スポーツをする上で必要な考え方などの獲得を期待する項目、（4）日常生活での成長への転移：「あいさつや返事をできるようになってほしい」「他学年のメンバーと仲良くなってほしい」など、クラブ以外でも続けて欲しい成長を期待する項目、となった。また項目作成には、『ドッジボールオフィシャルルールブック第6版』に記載された統一ルールの基本理念を反映させた。自分で考え積極的に行動する“自主性”、自分の行為に最後まで責任を持つ“自己責任”、常に前向きな姿勢を示す“向上心”

についての項目が含まれ、他の少年スポーツで期待される成長とは異なる独自の観点も検討対象とした。

この項目を元に、ドッジボール交流会(2008年1月17日、茨城県常陸大宮市開催)にて、参加チームの養育者にどのような成長が子どもにあることを期待するかについて予備調査を行った。評定は5件法(“強く期待する”、“やや期待する”、“どちらでもない”、“あまり期待しない”、“ほとんど期待しない”)とした。241名の回答結果から、質問の意図が分かりづらい項目や、(フロア効果により)成長を期待していないと解釈できる項目を除外した。以上から本調査で使用する43項目が採用された。内訳は、運動能力の向上7項目、競技上の精神的成長8項目、スポーツの捉え方の成長15項目、日常生活での成長への転移13項目であった。

2. 2 調査対象者

日本ドッジボール協会が主催した、第18回全日本ドッジボール選手権(2008年8月17日、東京体育館開催)に、全国47都道府県の代表として参加したチームの監督やコーチ、子どもの保護者ら計960名に調査を実施した。調査に回答した574名分のデータ(回収率59.8%)から記入漏れのあったものを除外し、最終的に計522名を分析の対象とした。続柄別の内訳は、母親364名、父親121名、その他19名(無回答18名)であった。また、クラブチーム内での役割別では、指導者またはコーチ41名、保護者450名(無回答31名)であった。

2. 3 質問紙

質問紙はフェイスシートと予備調査で選定された43項目で構成された。フェイスシートでは前述したチーム内での指導立場(監督やコーチ、その他)、子どもとの続柄(母・父・その他)などを確認した。予備調査では「子

どもの成長に期待すること」として調査を行ったが、本調査では「ドッジボールに参加したことで生じた子どもの成長」について評定を行った。そのため質問項目の文末は「…してほしい」から「…するようになった」に変更し、6件法(“たいへん当てはまる”、“かなり当てはまる”、“わずかに当てはまる”、“わずかに当てはまらない”、“あまり当てはまらない”、“まったく当てはまらない”)による評定とした。前節で触れた通り、項目作成にはドッジボールで指導する上での独自の理念が反映されている。また、クラブチームに預けた後の子どもの成長について質問したことから、これ以降は検討した尺度を「ドッジボール教育効果判定尺度」と呼ぶ。

3. 結果

3. 1 ドッジボール教育効果判定尺度の構成

養育者による判断基準の潜在構造を探るために、ドッジボールによる教育効果判断尺度の43項目に探索的因子分析(主因子法、promax回転)を行った。固有値の減衰をもとに4因子を設定し、共通性の極端に低い項目を除外し、因子負荷量が一つの因子にのみ.40以上の値をとることを基準とし項目選定を行った。この結果、4因子29項目が抽出された(Table 1)。

第1因子は、状況判断や選択などの自己責任と行動全般に対する自主性の項目から構成された。これは日本ドッジボール協会の統一ルールにおける基本理念の3つのうち2つ、自己責任と自主性の成長を評価したものと考えられる。以上から、第1因子は自己判断因子と命名された。

第2因子は、試合中の競争心や、それに伴う自信の表れなどを評価する項目から構成された。これもまた統一ルールの基本理念の1つ、向上心の成長を評価したものと捉えられる。よって第2因子は向上心因子と命名され

Table 1 ドッジボール教育効果判定尺度の因子分析結果（主因子法、promax 回転、 $N=522$ ）

項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
第I因子：自己判断 ($\alpha = .94$)				
次の行動を自分で考えることができるようになった	.79	-.04	.09	-.08
自分の行動に責任を持つ行動や言動が見られるようになった	.70	.21	-.20	.12
目標達成にはどうすべきかを自分で考えるようになった	.64	.39	-.20	-.01
『なんでもやればできる』ということが感じられる行動が見られた	.64	.11	.17	-.11
第II因子：向上心 ($\alpha = .90$)				
強い相手に負けないぞというチャレンジ精神をもつようになった	-.07	.92	.06	-.10
ライバルに勝とうとする競争心あふれる行動がみられるようになった	-.07	.91	-.03	-.02
子ども自身が自信のついた行動や言動がみられるようになった	.10	.68	-.02	.08
『負けてくやしい』という想いを表現するようになった	-.05	.57	.11	-.11
第III因子：運動技術 ($\alpha = .79$)				
速いボールを投げられるようになった	-.01	-.02	.71	.02
体力がついた	.03	-.01	.65	.06
ボールをキャッチすることが上手になった	.00	.10	.64	-.06
動きが俊敏になった	.06	.09	.57	.12
第IV因子：社会性 ($\alpha = .80$)				
自分から家族や他の人へのあいさつや返事をできるようになった	-.03	-.12	.05	.83
元気に大きな声を出せるようになった	-.11	.19	.12	.60
人としてよりよく生きる力が身についた	.14	.15	.02	.56
公共施設や交通機関の利用マナーが身についた	.36	-.14	-.02	.46
因子間相関	第I因子	-		
	第II因子	.78	-	
	第III因子	.67	.65	-
	第IV因子	.73	.68	.49

※因子得点を算出するために利用した項目のみ抜粋

た。

第3因子は、ドッジボールの技術も含めた俊敏性、体力の向上など様々なスポーツに必要な運動能力の向上を評価する項目から構成された。運動能力の成長は、ドッジボールをする小学校時代に体の成長とともに大きく伸びるもので、養育者も実感しやすかったものと考えられる。よって第3因子は運動能力因子と命名された。

第4因子は、日常生活における模範的な態度や社会のルール・マナーを獲得したことを評価する項目が集中した。これらの社会的技能はクラブ内で認められた子どもの成長であるが、ドッジボールというクラブチームを離

れたところでも要求される能力であり、一般性が高いものである。以上より、第4因子は社会性因子と命名された。

各因子における Cronbach の α 係数は.94-.79の値をとり、内の一貫性が確認された。また第3因子と第4因子間の相関はやや低いものの ($r=.49$)、他のいずれの因子間相関も高い値を示した ($r=.78-.65$)。これは「運動能力と比較したら社会性はまだ伸びていない」といった評価基準ごとの相対的な差は判断するものの、子どもの成長全般を考えたときはどれも伸びていると養育者が感じたため、と推察される。

3. 2 各養育者による教育効果判断の比較

教育効果の評価に関して養育者間で判定の傾向があるかを検討するために、4 因子の下位尺度得点の比較を行った。因子得点は各因子への負荷量が高かった Table 1 に示した 4 項目ずつの評定平均値とした。なお、各項目については“たいへん当てはまる”と評定したものを最大値 6 点とし、“まったく当てはまらない”までを 1 点間隔で割りあてた。

まずは、普段から養育に携わっている保護者とドッジボール場面でのみ指導に携わる指導者と比較した (Figure 1)。養育者 (指導者、保護者) × 下位尺度 (自己判断、向上心、運動能力、社会性) の 2 要因混合計画による分散分析を行った結果、下位尺度の主効果が示された ($F(3, 1467) = 53.84, p < .01$)。多重比較の結果からは、運動能力の評定が他の 3 因子の評定よりも有意に高かった。養育者の主効果、および交互作用は認められなかった。これは、全体的な評定に養育者の関わり方による違いが認められなかったことを示すものであった。

次に、母親と父親の評定平均の比較を行った (Figure 2)。養育者 (母親、父親) × 下位尺度 (自己判断、向上心、運動能力、社会性) の 2 要因混合計画による分散分析を行った結果、こちらも下位尺度の主効果のみが認められ ($F(3, 1449) = 118.14, p < .01$)、多重比較の結果、運動能力の評定が他よりも有意に高かった。なお、養育者の主効果、および交互作用は示されなかった。この結果も父親、母親の間で子どもの成長についての評価に大きな差がなかったことを示した。

4. 考察

4. 1 ドッジボールによる子どもの成長判断の潜在構造

ドッジボール教育効果判定尺度の因子分析の結果から、4 因子構造が抽出された。潜在

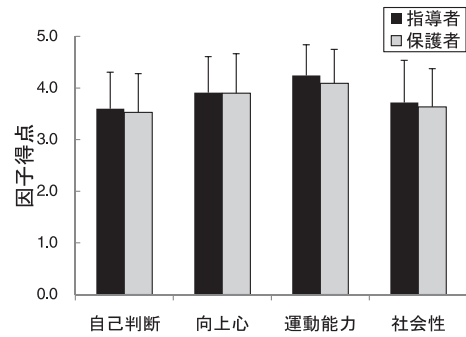


Figure 1 指導者・保護者ごとの因子得点平均 (max=6.0)

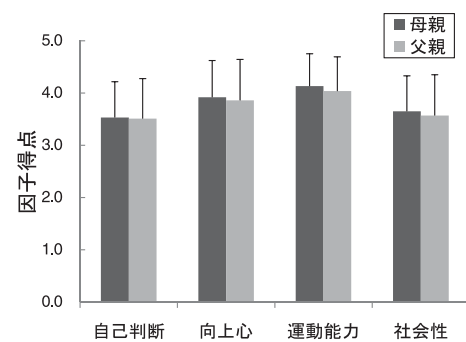


Figure 2 母親・父親ごとの因子得点平均 (max=6.0)

因子はそれぞれ、自己判断、向上心、運動能力、社会性の成長について判断しているものと解釈された。

予備調査の段階で分類した成長を期待する要素、運動能力の向上、日常生活での成長への転移は、それぞれ運動能力因子と社会性因子によって成長を判断しているものと考えられる。その一方で、競技上の精神的成長、スポーツの捉え方の成長などを扱うとき、養育者は判断に対する別の視点を持っていることが示唆された。子どもの成長した側面を捉えるときに、ドッジボールの競技理念に近いような判断基準、すなわち、自主性と自己責任を総括したような自己判断の行動と、競技に向かう前向きな姿勢である向上心を示す行動

で成長の判定をしていたといえる。運営に深く携われば、ドッジボールの統一ルールの背後にさまざまな理念が隠されていることは理解されてくる。たとえば参加当初ボールをよけるだけだった子どもが投げられたボールを積極的に取る場面を見かけたとき、養育者はその運動能力が上がったことだけでなく“自分から”取りに行った自主性を評価するかも知れない。養育者側のこの独自の意識が、それぞれのスポーツによってかなり隔たりがあることも示唆している。

少年スポーツに参加する子どもの意識については、その競技内容を問わず包括的に検討されていることもあるが（たとえば藤原と堺，2004）¹⁾、養育者の意識を検討するときは、その競技特性や運営形態などに留意が必要であろう。これらの結果から見えてくるのは、養育者の意向が一方向的に運営に反映される、というより、養育者の意識そのものも従来のクラブ活動と運営に大きく影響される相互作用的な側面である。

4. 2 ドッジボールによる教育効果の判定における養育者間の相違

下位尺度（自己判断、向上心、運動能力、社会性）の得点に養育者間で差が生じるかについて検討した結果、下位尺度の評定傾向はいずれの養育者も類似したものであった。運動能力についてはいずれの養育者も高く評価していたが、これは他の3つの下位尺度よりもその成長を見つけやすいためと推察される。精神面での成長を行動の中に認めるのは容易ではないだろう。

注目すべきは、指導者と保護者でその評定傾向が一致していた点である。養育者間のさまざまな意識にズレが生じる先行研究の報告を考えると、これは意外な結果ともいえる。この結果が生じた背景には2つの要因が推察される。第1の要因は、養育者らが少年スポーツの運営に求める意識についてはその立

場によって差異が生じるものの、子どもたちの成長判断という側面では一致した見解が得られる、ということである。養育立場の違いによる教育効果の評定差については、他の少年スポーツの報告も待たれるところである。そして第2の要因は、競技期間が限られたコミュニティスポーツとして運営されるドッジボールでは、活動に関する養育者間のコンセンサスが取りやすい、ということである。プロスポーツが存在しない以上、ドッジボールのクラブチームが競技指向型の指導に偏ることは少ない。地域指向型として運営し子どもの育成に携わるという意識が、子どもの成長を判定するときにも養育立場による差異を生じさせなかったのかも知れない。この要因についても、プロ化されているメジャースポーツの競技指向型クラブチームの報告との比較を経ての議論が望まれる。

4. 3 今後の展望：ドッジボールの発展に向けて

ドッジボールはプロ化されてないマイナースポーツの一種目である。それゆえ、大人たちがそれに参加する子どもをサポートするとき、その教育的視点が競技技術の成長ではないところを積極的に捉えようとするのだろう。しかし裏を返せば、小学校時代に競技生活が終わってしまうコミュニティスポーツの教育効果をどこに見出せば良いのか、という迷いも個々の養育者が持っていることも容易に想定できるのである。マイナースポーツであってもその間口の広さや年代に関係なく経験されていることを考えれば、子どもの側は競技の中や仲間関係の中などからそのスポーツの魅力が無意識のうちに感じているだろう。そのとき養育者が「子どもがやりたいことをやらせればなんらかの重要な経験や体験になる」と漠然とした考えでサポートしては、サポートの動機づけそのものが曖昧になってしまう。養育者はどのように成長を実

感しているかを実証的に検証することが、学術的意義と同時に、ドッジボールにおける教育効果を指導者や保護者が共通認識することで各チーム一丸となるきっかけとなれば、という想いもあった。

前述したように、スポーツ少年団に参加する子どもの人数は相対的に増えているものの、日本ドッジボール協会の加盟チーム数は、ピーク時には2000を超えていたが、2007年現在1400にまで減少している。過去に全国大会で優勝した名門チームも現在は解散している、また各地方のクラブチームもメンバー集めに必死である、といった現状もある。ドッジボールの発展には、まず、社会的な注目を集めることが課題であろう。

大人がドッジボールに携わるきっかけとして多いのは、自分の子どもがドッジボールを始め、養育者として子どもと関わるためにチームの指導に当たる、などである。審判技術を覚え、子どものチームの帯同審判として大会を支える養育者も多い。これと平行してドッジボールのすばらしいところは、養育していた子どもが小学校を卒業して、今度は指導者やコーチとしてドッジボールに携わり続けられるところにある。このような複数世代からなる養育者が続けて運営を支えるのは、ドッジボールには他のスポーツにはない教育効果があることを実感しているためと考えられる。しかし、これを実証する研究は今のところない。「みるスポーツ」「するスポーツ」と平行して、近年はコミュニティスポーツの運営などの「ささえるスポーツ」の意義や価値自体が見出されつつある(山口, 2004)⁹⁾。だが、教育効果の意識が少ないままの運営活動では、競技をささえる大人が少なくなってしまう、新しい人をドッジボールに引きつける力が弱くなってしまう。ドッジボールというスポーツが、学校の授業や休み時間の子どもたちだけのレクリエーションという枠で終わらせないためには、養育者の力量が絶対要件

である。

プロスポーツ化されていない小学生のみが選手となれるコミュニティスポーツ、というその特徴は、教育効果の側面から考えればさまざまな可能性を秘めている。このことを運営する養育者が明確に認識することが、コミュニティスポーツとして独自の発展を支えることに繋がるだろう(本研究は、予備調査を含めた2回の調査は松崎が行い、データの分析と解釈は佐野が担当した。本文の作成は佐野と松崎が共同で行い、全体の構成は宮寺を含めた3名で行った)。

引用文献

- 1) 藤原 誠・堺 賢治 子どものスポーツクラブ活動に関する研究－試合への上場状況と活動意識－ 愛媛大学教育学部紀要, 2004, 51, p.121-124.
- 2) 日本体育協会 “登録状況／スポーツ少年団－日体協－” 200http://www.japan-sports.or.jp/club/data/registration.html> (2008年10月10日).
- 3) 小松幸円・嶋谷誠司・山下昭子・池田尹雄 子どものスポーツクラブに対する母親の意識について－横浜のサッカークラブの調査から－ 日本体育学会大会号, 1992, 43A, p.152.
- 4) 桑原奈緒子・柳敏晴・向山貴仁・竹下俊一・川西正志 少年スポーツ指導者の指導行動に関する研究－指導者の指導の目的と保護者の期待の違いに着目して－ 日本体育学会大会号, 1999, 50, p.270.
- 5) 岩下 聡・山下昭子・小滝紘一・鈴木英夫・片尾周造・鎌田 章 子どものスポーツクラブに関する研究－母親のスポーツクラブに対する意見について－ 日本体育学会大会号, 1993, 44, p.174.
- 6) 李 真・仲野隆士・金子守男・守能信次・江橋慎四郎 チームの年齢構成の違いが地域スポーツクラブへの参加に及ぼす影響に関する一考察 中京大学体育学論叢 1989, 30 (2), p.1-10.

- 7) 日本ドッジボール協会 “日本ドッジボール協会” 2005 <<http://www.dodgeball.or.jp/>> (2008年10月10日).
- 8) 日本中学校体育連盟 “(財)日本中学校体育連盟” 2008 <<http://www18.ocn.ne.jp/~njpa/>> (2008年10月10日).
- 9) 山口泰雄 スポーツ・ボランティアへの招待
-新しいスポーツ文化の可能性- 世界思想社 2004.